

はじめに

本書の狙い・対象読者

本書は、英語を学んでいる生徒・学生や一般学習者の方々、および英語を教える立場にある英語教育関係の方々を念頭に、英語史研究者3名が執筆したものである。とりわけ英語教師に、基本英単語を教える際の「虎の巻」として参照し、利用してもらうことを想定して本書を企画した。

英語教育の研究者ではなく英語史の研究者が作成した英単語のハンドブックであるから、語源うんちくはもちろん、歴史的・通時的観点からの記述が豊富であり、この点でポキャビル教材を含めた類書とは一線を画する。また、語彙学習それ自体から離れても、英語の歴史に関心をもつすべての方々にとって、好奇心が刺激され、新たな発見の多い読み物となっていることと確信する。

語源がなぜ重要か

英語学習・教育において語彙は暗記事項の最たるものとみなされている。授業などでも体系的に扱うことが難しく、往々にして学習者個人の自助努力に委ねられて終わってしまうことが多い。これまでも英単語の効果的な学習方法は多く提案されてきた。なかでも、少数の重要な語根や接辞を覚え、それをもとにして派生語や複合語を芋づる式に学習していくという「語源」に着目した学習法は、日本でも英語圏でも長らく実践されてきた伝統であり、そのような学習書やドリルはすでに多く出版されている。確かに個々の語根や接辞を覚えることによる語彙学習は実際的にはあるものの、それ自体はやはり暗記項目にとどまる。

しかし、英語史の観点からみると、単語の派生の原理、意味変化の傾向、発音・綴りの変遷などは、一般に思われている以上に体系的に把握され得るのである。英語史を通じて観察される言語変化の筋道を学ぶと、これまで結びつけたこともなかったような個々の単語が実は有機的に結びついていた、と気づく機会が圧倒的に増える。本書では、単語の語源を学ぶ重要性を大前提としたうえで、個々の単語の起源と発達の間に見られる、英語史上・言語変化上の共通項をなるべく多く指摘し、改めて語源的知識の価値を訴えたい。

見出し語の選定方法とその意義

本書は見出し語として約1000語を収録しているが、その選定に際して参照したのが『新JACET8000』である。『新JACET8000』は大学英語教育学会(JACET)が刊行する学会公式基本語彙表で、イギリス英語とアメリカ英語の大規模コーパスから得たデータをもとに英語教育の実態も考慮して選定された高頻度語8000語を提示している。本書では、そのうち最も頻度の高い1000語を見出し語の基本としている。このようにした理由は主に2つある。

一つは、本書はとりわけ英語教師が授業で使えるネタをふんだんに盛り込んだ「虎の巻」とな

ることを目指したことから、収録語の中心は小中高のいずれの段階でも話題にしやすい単語、かつ、学習者に身近で興味を惹きやすい単語が良いと考えたためである。

第二の理由は、基本語の特徴にある。基本語は全体的な傾向として歴史が長く、激しい変化を経ていることが多い。結果、基本語の多くにおいて現代の姿や使い方は元の姿から大きく変わっていて、その語の本質が非常に分かりにくくなっている。つまり、基本語は簡単そうに見えて難しい。しかし、裏を返せば、その歴史を紐解くことで各単語の本質に一気に迫ることができ、語の理解を深めることができる。語源学習の醍醐味をもっとも味わえるのも基本語というわけだ。

関連語として 1000 語以外の単語も解説

本書は『新 JACET8000』の上位 1000 語を見出し語とする一方で、それぞれの見出し語の解説中で、関連する語も多数取り上げている。関連語に含まれるのは、印欧祖語まで遡ると同じ語根に基づく想定される語、同じ種類の変化を経ている語、見出し語の類義語、語幹や接辞が共通する語といったものである。このように一つの単語が持つ歴史的な広がりや繋がりを見ることが、すでに持っている単語の知識が有機的な結びつきを持つようになり、一方で、語源的知識をふまえて新たな語彙を知ることでもでき、結果として効果的なボキャビルにつながる事が期待される。

上述のように、本書は英語を教えたり学んだりする際に使える本格的な語源ハンドブックとして世に送り出すものである。まずは各単語の歴史を今の英語の理解に活かしてもらえればと思う。一方で、著者 3 人はいずれも英語史研究者である。長年並々ならぬ情熱を英語史という学問に注いできた。その立場からすれば、本書をきっかけとして英語史そのものにも関心を深めてもらえればこれ以上の喜びはない。

末筆ながら、執筆に際して多大なるサポートをいただいた研究社編集部青木奈都美様、元研究社編集部の津田正様に厚く御礼申し上げます。2018 年に企画が動き出してから早 7 年、忍耐強く見守っていただき完成にこぎつけることができました。

2025 年初夏 著者一同

目次

はじめに	iii
本書の利用法	vi
本書の構成／見出し語に関する各項目の読み方／凡例／発音記号表	
見出し語一覧	x
印欧祖語語根に関する見出し語	xviii
英語史概説	xxii
本編	1
アルファベット順 (A-Y)	1
テーマ別 (人称代名詞, 基本数詞, 季節, 月, 曜日)	380
用語解説	399
主要参考文献	412

見出し語一覧

A

a, an	animal	band	boy / girl
able	another / other	bank	bread
about	answer	baseball	break
abroad	any	basketball	breakfast
accident	anyone	bath	bridge
across	【⇒ someone】	be	bright
action / active /	anything	beach	bring
activity / actor /	【⇒ something】	bear	brother 【⇒ father】
actually	appear	beautiful	brown
add	apple	because	brush
address	apply	become	build / building
adult	April 【⇒ テーマ別:	bed	burn
afraid	月】	before / behind	bus
after	area	begin	business
afternoon	arm	behind 【⇒ before】	busy
again / against	around	believe	but
age	arrive	bell	buy
ago	art / artist	below	by
agree	as	better / best	
ahead	ask	between	
airport	at	big	C
album	attention	bike / cycle	cake
alive	August 【⇒ テーマ	bird	call
all	別: 月】	birthday	camera
almost	autumn 【⇒ テーマ	black	can / could
alone 【⇒ only】	別: 季節】	blue	cap
along	average	board	car / carry
already	away	boat	card
also		body	care / careful /
always	B	book	carefully
among	baby	boring	carry 【⇒ car】
and	back	born	case
angry	bad	both	castle
	bag	bottle	cat
	ball	box	catch
			cause

celebrate	continue	die	encourage
center, centre	cook	different / difference	【⇒ courage】
century	cool	difficult	end
chair	copy	dinner	energy
chance	corner	dish	engineer
change / exchange	could 【⇒ can】	do	enjoy
character	country	doctor	enough
cheap	courage /	dog	enter / entrance
check	courageous /	dollar	environment
child	encourage	door	especially
chocolate	course	down	【⇒ special】
choose / choice	cover	drama	even
city	cream	draw	evening
class / classroom	crowd	dream	event
clean	cry	drink	ever
clear	culture	drive / driver	every
clever	cup	drop	everybody /
climb	cut	dry	everyone
clock	cycle 【⇒ bike】	during	【⇒ someone】
close	D	E	everything
cloud			【⇒ something】
club	dad / daddy	each	example
coach	dance	ear	exchange
coat	dangerous	early	【⇒ change】
coffee	dark	earth	excited / exciting
cold	data / date	easily 【⇒ easy】	excuse
collect	daughter	east 【⇒ south】	exercise
college	day	easy / easily	expensive
【⇒ university】	dear	eat	experience
color, colour	December 【⇒ テー	effort	explain
come	マ別: 月】	egg	express
common	decide	eight 【⇒ テーマ別:	eye
communication	deep	基本数詞】	F
company	department	either	face
computer	desert	electricity	fact
concert	design / designer	eleven 【⇒ テーマ	factory
connect	desk	別: 基本数詞】	fair
contest	develop	else	

P

page /péidʒ/

[名] ページ

■本は各ページをしっかりと結びつけたもの

語源・由来

15 世紀にフランス語から借用。印欧祖語 *pag- (結びつける, 留める) に基づく。

歴史 意味の発達

語根の意味を考えると, 書物の各ページは互いに「しっかりと結びつけられ」て書物の形を成していると捉えられたと考えられる。bind (縛る) に由来する binding (製本) にも同様の発想が反映されている。

関連 印欧祖語 *pag- (結びつける, 留める)

主だった本来語でこの語根に基づく語はないが, ラテン語やフランス語からの借用語にはこの語根に基づくものが多くある。ここでは意味発達の仕方がたどりやすいものをいくつか紹介しておこう。compact (ぎっしり詰まった, 密集した) は「しっかりと結びつける」こととの意味のつながりが分かりやすい。同様に, impact (衝撃, 衝突) もこれと通ずる「ぎゅっと押し付ける」ニュアンスに基づく。pact (約束, 契約), compact (契約, 盟約), peace (平和, 和睦) も同じ語根に基づくが, 日本語で「和睦を結ぶ, 契約を結ぶ」などというのと同様の感覚に基づき意味が発達したものである。pay (支払う) も同根だが, これは元来「(金品などで) 諍いなどを静める, 相手を満足させる」という意味で, 「和睦, 契約」等と密接に関わる語であった。

paint /péint/

[名] 絵具, 色を塗ること [動] 塗装する, ペン

キを塗る, 絵を描く

■ picture と同根

語源・由来

中英語期にフランス語から借用された動詞 paint (色を塗る) が名詞に転用されたもので (⇒品詞転換), 主な使用は近代英語期から見られる。印欧祖語 *peig- (切る, 掘り込みを入れて印づける) に基づく。語根の「掘り込みを入れて印をつける」という意味からは「刺青を入れる」といった意味も発達し, そこからさらに「絵を描く」>「塗る」という意味発達をしたと考えられる。この語根に基づく語には他に⇒ picture (写真, 絵), depict (描写する), pigment (顔料) などがある。

歴史 意味の発達

動詞の意味から発達した「絵具」「化粧」が原義だが, 「色を塗ること」という意味は主に 20 世紀になってから使われるようになった。

pair /péə | péa/

[名] 組, ペア [動] ペアにする

■ゴルフのパーと関係がある

語源・由来

フランス語からの借用語で, 14 世紀頃から記録に現れる。印欧祖語 *perə- (割り当てる, 与える) に基づく (⇒ part)。原義は「等しく割り当てられたもの > 同等のもの」で, peer (対等者, 同僚) や par ((ゴルフの) パー) などとも同根。

歴史 用法の発達

名詞としての利用が最初で, 動詞としての利用は 16 世紀頃から見られる (⇒品詞転換)。

現在は a pair of shoes (一足の靴) のように of を付けるが, 中英語期には of は付けない

ことも多かった。また、もともと無変化で複数にもなったが最近はその使用はまれである。

paper /péipə-| -pə/

〔名〕紙，新聞，書類，文書，論文

■パピルスに由来

語源・由来

ギリシア語でパピルス意味する語に由来し，papyrus（パピルス）と⇒二重語。ラテン語を経由し，14世紀にフランス語から借用。

〔歴史〕借用当初から「紙」の意

papyrusは14世紀にラテン語から英語に入り，現在まで「パピルス」の意で使われている。一方，同世紀にフランス語から入ったpaperは，papyrusがフランス語において約まったものに由来し，フランス語においてすでに「紙」を意味し，英語でも借用当初から「紙」を表した。紙は中国で発明され，ヨーロッパにも10世紀あるいは11世紀に伝わり，14世紀までには広く生産されるようになっており，paperはその名称として使われた。

〔関連〕紙の歴史

パピルス紙は古代エジプトで使い始められ，地中海世界にも伝えられ使われたが，中世ヨーロッパにおいては，文書を記録する媒体として子羊等の皮から作られる羊皮紙（parchment）が主流であった。これと並行して，上記のようにヨーロッパに紙が伝わると，これが徐々に普及し，特に15世紀中頃以降に活版印刷が普及すると，書物等には紙が使われるのが一般的になっていった。

parent /pé(ə)rənt, páér-| péər-/

〔名〕親

■原義は「子を産む者」

語源・由来

ラテン語やフランス語からの借用語で，15世紀に最初の記録がある。印欧祖語 *perə-（生産する，入手する）に基づく。

〔歴史〕薄れる原義

もとなっていたラテン語の単語は「産む」を意味する動詞の現在分詞に由来し，「（子孫を）産む者」が原義だが，原義は薄れ英語では借用当初から「親」を意味した。20世紀前半にアメリカで使われ始めた parenting（子育て，育児）でも，語根に基づく「子供を産む」ことから離れ，子供を育てることのほうに意味の中心がシフトしている。

〔関連〕印欧祖語 *perə-（生産する，入手する）

この語根に基づく語には，接頭辞 pre-（前もって）を伴う prepare（準備する），接頭辞 re-（再び）を伴う repair（直す），se-（離れて）を伴う separate（分離する）などがある。

park /páək| pá:k/

〔名〕公園，環境保全地区，運動場，駐車場

■原義は「囲い地」

語源・由来

ラテン語に由来する語で，13世紀にフランス語から借用。

〔歴史〕意味の発達

ラテン語で「囲い，柵」を意味する語に由来し，元来は動植物を飼育・栽培する目的で作られた囲い地のことを意味した。英語でも借用当初は狩猟の獲物となる動物が保護されている囲い地を意味したが，そこから，囲い地一般を表すようになった。「公園」の意は17世紀に初めて記録されているが，これも当初は王家の所有する囲い地のうちで一般に公開された庭園を意味した。「環境保全地区」の意は19世紀にアメリカで使い始められた。また，「駐車場」の意で使われるようになったのは20世紀になってからである。

関連 paddock と同語源

paddock (調教用馬場) は、(現代では方言のみに残る) parrock (囲い地) の異形として使われるようになった語である。parrock は park の根底にあるラテン語で「囲い、柵」を意味する語に由来する。したがって、park と paddock とは⇒**二重語**の関係にある。

part / party

/pɑːt | pá:t/ ㊦ 部分、一部、役目 ㊦ 分ける、分かれる

/pɑːti | pá:-/ ㊦ 会、集まり、パーティ、政党
■「パーティ」の意は**大分遅い**発達

語源・由来

part はラテン語に由来し、ラテン語やフランス語から借用された。古英語期には文法用語としてすでに使われているが、本格的に使われるようになったのは 13 世紀末以降である。一方、party は 13 世紀末頃にフランス語から借用。いずれも、印欧祖語 *perə- (割り当てる、与える) に基づく。

歴史 意味の発達

古英語期に借用された part は part of speech (品詞) の意で文法用語として使われたが、使用頻度は非常に低かった。この語はラテン語 pars/partis (部分) に由来するが、中英語期にはこの意味で再びラテン語やフランス語から借用された。原義は「(全体の中で割り当てられ与えられた) 部分」だと考えられる。同じ語根に基づく動詞 part (分ける、分かれる) は 13 世紀以降にラテン語やフランス語から借用された。

一方、同じ語根に基づく party はフランス語からの借用語で、借用当初は part と同様、「部分、一部」や「品詞」等を意味した。そこから「(全体の中の一方向) 側」の意が発達し、「争う者同士の一方向の側」や「同盟、連合 (<

味方あるいは敵側として共に戦う者の集まり)」等の意も発達した。「政党、党派」等もその延長線上で発達した意味である。このように party は「人々の集まり」を意味するようになったが、「会、パーティ」の意味も「人々の集まり」というところから発達したもので、18 世紀初頭頃に最初の記録がある。

関連**① party の発音**

party はアメリカ英語においてはしばしば「パーリー」のように聞こえる。これは /t/ の有声化によるもので、water が「ワーラー」、daughter が「ドーラー」のように聞こえるのも同じ音変化による。これはアメリカ英語に特有の音変化で、イギリス英語では基本的にこの音変化は見られない。

② 印欧祖語 *perə- (割り当てる、与える)

この語根に基づき、語根の意味とのつながりが分かりやすいものには、compart (区画する)、impart (分け与える、伝える)、接頭辞 bi- (二) を伴う bipartite (2 部に分かれた)、parcel (小包、一群)、particle (粒子) などがある。particle に含まれる -cle は⇒**指小辞**で、particle は文字通りには「小さい部分」を意味する。participate (参加する) の後半要素 -cipate はラテン語で「取る (take)」を意味する動詞 (capere) に由来し、同じ意味のフレーズ take part (in) (…に参加する) と同じ感覚に基づく語だといえる。

この他、pair (一組、ペア)、par (同等)、peer (同僚、貴族)、parity (等価、同等) も同じ語根に基づく。pair は「二者から成るグループ」が原義で、「人の集まり」を意味する party と似ているがより特化した意味を獲得した語だといえる。pair を成す二人は「同等、同輩」であることから、par や peer においては「同等、同僚」等の意味が発達している。なお、peer には「貴族」の意もあるが、これ

は貴族同士がみな同等であるという考え方に由来する。アーサー王伝説においては、アーサー王の周りに円卓の騎士たち (the Knights of the Round Table) がいたとされるが、彼らが会合の際に上座や下座のない円卓を使ったのは、アーサー王も含め同じテーブルに着いた貴族たちが皆同等であることを象徴的に示すものだといわれている。その他、compare (比較する) の -pare も *perǝ- に基づく。

pass /pæs | pá:s/

動 過ぎる, 通過する, 合格する 名 通過, 通行券, 合格, (球技の) パス

■ past は pass の過去形に由来

語源・由来

動詞 pass はフランス語からの借用語で、13世紀頃から文献に現れる。名詞 pass は別途フランス語から借用されたが、動詞から転用した部分もある (⇒品詞転換)。名詞としては16世紀頃から見られる。

歴史 語形・意味の変化

過去形, 過去分詞形は passed と past の二形が当初からあるが、以下に述べる別の用法の past が発達したことで、これとの差別化がされるようになり、もっぱら passed が使われるようになった。

過去分詞形の一形態 past は、前置詞「…過ぎの」(例: half past ten 10時半) と名詞「過去, 過去形」に発展した (⇒品詞転換)。どちらも14世紀頃から記録に現れる。

関連 passage, passenger

pass (通過する) に関わりのある passage (通路, 文章の一節) はフランス語から借用され、14世紀頃から記録に現れる。その行為者名詞である passenger (乗客) も同じ頃にフランス語から借用された。これは本来は「(航路を通過する) 船, 客船」や「(ある場所を通過

する) 歩行者, 旅人」を指したが、「船などの乗客」に限定されるようになった。もともとは passager のような綴りで n は -ger の前になかったが、中英語の終わり頃から n が添加されるようになった。同じ現象は同じくフランス語から借用された message の行為者名詞 messenger にも起きた。

past ⇔ future

pen /pén/

名 ペン

■ pencil とは語源の関係なし

語源・由来

中英語期にフランス語から借用された「羽根, ペン」などを意味する penne, ラテン語から借用された同じく「羽根, ペン」などを意味する penna に由来する。印欧祖語 *pet(ə)- (駆け込む, 飛ぶ) に基づく。

歴史 「羽根」から「ペン」へ

「羽根」が原義で、羽根が筆記用具 (羽根ペン) として使われたことから「ペン」という意味で使われるようになり (⇒メトニミー), その後、羽根ペン以外の「ペン」も広く指すようになった (⇒意味の一般化)。英語では借用当初から両方の意味を持つ。ただし原義の「羽根」は現在ではまれで方言等に残るのみである。

関連 印欧祖語 *pet(ə)- (駆け込む, 飛ぶ)

*pet(ə)- は本来語では feather (羽根) に発達している (/p/ → /f/ および /t/ → /θ/ の音変化は⇒グリムの法則)。一方、*pet(ə)- はラテン語 petere (求める, 目指す) にも発達しているが、これと関連する語として英語には petition (請願), appetite (食欲), repeat (繰り返して言う) などがラテン語・フランス語

から借用されている。

なお、pencil の pen- は pen (ペン) とは関係なく、ラテン語 penis (尾、ペニス) に由来する。14 世紀頃にフランス語から借用され、当初は「(先の尖った) 絵画用の筆」を指した。

people / popular

/pi:pl/ 〔名〕人々、(複数形で) 民族、国民 〔動〕…に人を住ませる

/pá(:)pjʊlə | pópjʊlə/ 〔形〕民衆の、大衆的な、人気のある

■同語源の単語

語源・由来

いずれの語もラテン語 populus (人々、国民) に由来する。people は 13 世紀末頃までにフランス語から借用、popular は 15 世紀前半までにラテン語より借用。

歴史 意味の発達

大本にあるラテン語 populus は「人々、国民」等の意で、people も借用当初からこの意味で使われている。複数形 peoples は「民族、国民」の意で用いられるが、16 世紀以降 19 世紀頃まではこれを好ましからざる用法とする向きがあり、使用が避けられる傾向にあったが、現在では普通に使われる。

popular はラテン語 populus の形容詞形 popularis (一般の人々の) に由来し、借用当初は主に「一般大衆の間で流通している」を意味したが、そこから 16 世紀後半には「一般大衆向けの」、17 世紀初頭頃までには「人々に好まれる、人気の」、18 世紀前半には「通俗的な」といった意味が発達した。

関連

① 語源的に関連する語

ラテン語 populus に由来する語には他にも、15 世紀に借用された populous (人口の多い)、16 世紀に借用された population (人口)、pop-

ulate (…に住む、居住させる)、popularity (人気) などがある。いずれもラテン語から直接借用された。一方、populace (大衆、民衆) は 16 世紀にフランス語から借用された。この他、popularize (大衆化する、普及させる) は、popular に動詞を形成する接尾辞を付けて 16 世紀に英語内で作られた。同様に、populism はラテン語 populus に接尾辞 -ism (…主義) を付けて 19 世紀に英語内で作られた。

② ラテン語 populus を含む格言

populus の複数形 populi を含むラテン語の格言、Vox populi, vox dei. (民の声は神の声) は非常に広く知られている。『朝日新聞』のコラムのタイトル「天声人語」ともよく似た意味を表す格言で、英訳版のタイトルとして使われている。

percent, per cent /pə'sent | pə-/

〔名〕パーセント、百分率

■ラテン語で文字通りに「100 のうちの〇〇」

語源・由来

ラテン語で「100 のうちの」を意味する前置詞句 per centum,あるいはイタリア語の per cento に由来する。英語では初期近代英語期の 16 世紀半ばに、これらを借用、あるいはなぞる形で初出している。アメリカ英語では 1 語として綴るが、イギリス英語では per cent と分かち書きする。

関連 ラテン語由来の前置詞

per はラテン語で「…ごとに、…のために」を意味する前置詞であり、中英語期に借用された。60 miles per hour (1 時間に 60 マイル)、40 hours per week (週に 40 時間)、10 dollars per head (一人あたり 10 ドル) のように用いる。per capita (1 人当たり、頭割りで) などでもラテン語から入ってきている。

他にラテン語から入ってきた珍しい前置詞

として, pro (…に賛成して), qua (…として, …の資格で), re (…について) がある。電子メールの返信欄にみる RE: は, このラテン語の前置詞である。

perfect /pəˈfɛkt | pɔː-/

形 完全な

■パフェは完璧なデザート

語源・由来

中英語期にフランス語から借用された parfit (達成された) に由来する。さらに遡るとラテン語 perficere (果たす, 成し遂げる: per- (完全に) + facere (成す, 作る)) の過去分詞 perfectus (果たされた) に行き着く。

歴史 綴りに合わせて発音も変化

当初はフランス語の語形 (parfit) に準じて c のない綴りだったが, 近代英語期に入った頃からラテン語の perfectus に基づく c を含めた語形が現れ始め, それが一般化した (⇒ **ルネサンス綴り字**)。ルネサンス期にラテン語の綴りに倣って英単語の綴りが変更された語の中には, b の文字が加えられた doubt や debt のように, 綴りだけが変わり発音は変化しなかったものも多くあるが, perfect に関しては, 綴りの変更に伴い発音も変化した。

関連 parfait

デザートの parfait (パフェ) は 19 世紀にフランス語から借用された parfait (完全なもの) に由来する。発音は /paʊˈfɛɪ | pɑː-/ で, t を発音しないのは語末の子音を発音しないフランス語の発音に基づく。

perform / performance

/pəˈfɔːm | pəfɔːm/ (動) 演じる, 果たす

/pəˈfɔːməns | pəfɔː-/ (名) 演技 (演奏), 成績, 遂行能力, 履行

■「義務の遂行」から「演技の遂行」に拡張

語源・由来

perform は中英語期にフランス語から借用され, 14 世紀頃から見られる。performance は perform からの派生語で, 主に近代英語から使われている。

歴史 意味の発達

本来は「per (完全に) + form (遂行する)」という意味で, 義務や命令, 要求として課されたことを「遂行する, 果たす」という意味だった。しかし次第に, 「舞台上の演技等の遂行」のような意味, さらに, 舞台上のものに限らず「演技等の遂行」に広がった。

performance は perform と同様の意味変化をたどった一方で, 「遂行の結果」や「遂行の質, 遂行能力」といった意味にも広がった (⇒ **メトニミー**)。

関連 接頭辞 per- を持つ語

per- は⇒ through (…を通して) を意味するラテン語の前置詞 per に由来する。through から thorough (完全に) という語が派生したように, per にも「…を通して」という意味と, 「完全に」という 2 つの意味があり, per- で始まる単語の意味に反映される。例えば, perhaps (おそらく) は「per (を通して) + haps (運)」, ⇒ perfect (完全な) は「per (完全に) + fect (成された)」といった具合である。

period /pɪ(ə)riəd/

名 期間, 間, 時代, 周期, 終止符

■原義は「周期」

語源・由来

ギリシア語に由来し, 15 世紀以降にフランス語やラテン語から借用。接頭辞 peri- と印欧祖語 *sed- (行く) に基づく語幹から成る。

歴史 原義と意味の発達

この語はギリシア語の接頭辞 peri- (周囲に)